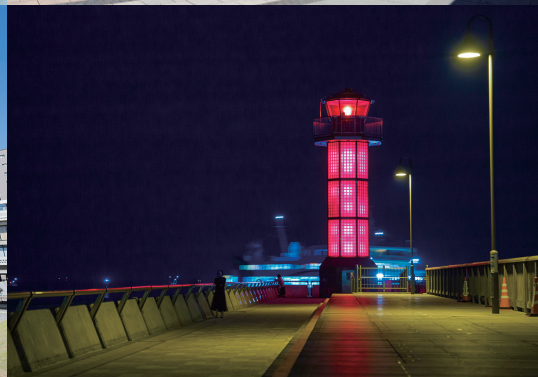


特集

伝統と革新の瀬戸内のみなとまちづくり



特集

伝統と革新の瀬戸内のみなとまちづくり

香川県は、1958年に竣工した県庁舎本館（現東館）を契機に、積極的にアートと近代建築をまちづくりに取り込み、今では国内のみならず国外からも注目を集めています。そこで今号では、香川県の池田知事にご登場いただき、「全県が海辺空間」という香川のみなとまちづくりについてご紹介します。また、瀬戸内こえびネットワークの甘利事務局長には、アートが紡ぎ出す島と港の賑わいづくりについてご寄稿をいただきました。



高松港に立つ高さ8mの2本のポールは、大巻伸嗣氏の作品「Liminal Air-core」

CONTENTS

- **RANDOM FOCUS 寄稿**..... 3
港と島と人を繋ぐ瀬戸内国際芸術祭
甘利 彩子 NPO法人瀬戸内こえびネットワーク 事務局長
- **TOP INTERVIEW**..... 8
**全県に海辺空間が広がる香川県
みなとを中心に人が回遊するまちづくり**
池田 豊人 香川県知事 × 山縣 宣彦 SCOPE 理事長
- **BEHIND PROJECT ①**..... 12
**歴史ある交流の拠点に
官民挙げて新たな魅力を創出**
国土交通省 四国地方整備局 高松港湾・空港整備事務所
- **BEHIND PROJECT ②**..... 16
**安心と安全とともに楽しく憩うみなとへ
人々に賑わいを誘うプロムナード整備**
香川県 土木部 港湾課
- **BEHIND PROJECT ③**..... 20
**空港から人と街を元気に
高松空港が目指す四国瀬戸内No.1**
高松空港株式会社
- **ZOOM UP**..... 24
防災・減災は、人・組織・地域を成長させる
奥村 与志弘 関西大学 社会安全学部 教授
- **COFFEE BREAK**..... 27
佐賀を豆腐の聖地に 第4回 多くの壁を乗り越えて
平川 大計

港と島と人を繋ぐ瀬戸内国際芸術祭

アートとともに歩む島々、港の賑わいづくり

今号は「伝統と革新の瀬戸内のみなとまちづくり」を特集テーマに、香川県の高松港を中心としたみなとまちづくりについてご紹介します。ここでは、その高松港を母港に瀬戸内の島々を舞台に展開される瀬戸内国際芸術祭が生み出す、港と島々の賑わいづくりについて、瀬戸内こえびネットワーク事務局の甘利事務局長に、これまでの取り組みについてご寄稿いただきました。

瀬戸内国際芸術祭

2010年から始まった3年に1度のアートの祭典「瀬戸内国際芸術祭」は、2025年で6回展を迎えました。舞台となるのは、瀬戸内海に浮かぶ直島や豊島などの島々と四国側の高松港、本州側の宇野港などです。島々や港の空き家や海岸などに作品が展示され、お客さんは船やバスを乗り継ぎ、歩いてアート作品を目指します。

毎回100万人近くのお客さんが全国あるいは世界各国からやってきます。アートは言語や国を超えた共感があります。また芸術祭のアート作品が美術館などに展示してあるものと違うのは、その土地に根ざした内容であり、地域の方やサポーターとの協働の上で成立しているものが多いということです。それ

により、これまで難解だと思われていた現代アートの門戸は広く開かれ、老若男女、幅広い方々が芸術祭に親しんでいます。



瀬戸内海 (Photo: Osamu Nakamura)

ここで芸術祭の代表的な作品を写真とともに紹介します。

2010年から毎回芸術祭に参加している王文志(ワン・ウェンチー)は、台湾は嘉義(かぎ)省の竹職人さんたちと、小豆島で巨大な竹のドームを作っています。開催年前年の冬から地元の方によって竹が切り出され、その数は四千本を超えます。竹の準備が整うと王さんと竹職人たちがやってきて、こえび隊と呼ばれるサポーターたちとともに、作品を作ります。これまで6回も作品を作ってきたので、地元のおじちゃんたちとも息ぴったり。なかなか言葉は通じませんが、作業段取りをお互いわかっているの、制作もスムーズです。芸術祭開幕に合わせてオープンした、美味しい棚田のおにぎりで有名な「こまめ食堂」から



甘利 彩子

NPO法人瀬戸内こえびネットワーク
事務局長

の差し入れもあり、国や文化を超えた交流が深まっています。



写真上：ワン・ウェンチー（王文志）「抱擁・小豆島」 写真下：制作時の様子（Photo 2点とも：Shintaro Miyawaki）



写真上：「島キッチン」の外観（Photo: Osamu Nakamura）
写真下：「島キッチン」の食事（Photo: yumomin）

^{てしま}豊島にある島キッチンはレストランでありながらアート作品でもある、魅力的な施設です。築120年の古民家を改装し、2010年にレストランとしてオープンしました。豊島は瀬戸内の島嶼部では珍しく湧水があちこちから湧く恵まれた島です。島キッチンのある^{からとおか}唐櫃岡地区にも「唐櫃の清水」と呼ばれる湧水があり、水道が通る以前は、地域のお母さん方が水仕事をし、井戸端会議をする場所でした。現在も定期的にお掃除されている大切な場所です。この水が水路を流れ、棚田の水を満たしています。海に面した棚田の風景は大変美しく、美味しいお米ができます。そんな豊かな島「豊島」を五感で味わってほしいと始まったのが島キッチンでした。豊島には市場やスーパーはないので、近所のおばあさまたちが大切に育てた野菜を買い取って使います。近海は豊かな漁場です。毎日違う種類ですが新鮮なお魚が入ってきます。美味しい米、野菜、魚と、地域のお母さんたちが代々受け継いできた漬物や味噌作りの技が加わり、美味しい定食を提供しています。お客さんはこの食事を食べて「あー美味しかった。豊島って豊かだな」と実感するのです。豊島は1975年以降、産業廃棄物不法投棄事件があり大変苦勞してきた場所です。一時はゴミの島と呼ばれた時期もありましたが、今、豊島は文字通り「豊かな島」として世界中の方が訪れる場所になりました。



豊島の棚田（Photo: Shintaro Miyawaki）



写真左：田島征三「Nさんの人生・大島七十年」－木製便器の部屋－(Photo: Keizo Kioku) 写真右：やさしい美術プロジェクト「カフェ・シヨル」(Photo: Shintaro Miyawaki)



全国に13あるハンセン病の療養所の1つ「国立療養所大島青松園」も芸術祭の舞台です。高松港から旅客船で約30分で行ける小さな島ですが、1907年にらい予防法ができ、1909年に島に療養所ができてから1996年まで、ハンセン病元患者さんの強制隔離があった場所です。芸術祭では元患者さんのこれまでの大島の記憶と記録を伝え、これから子供たちが通う大島であってほしいという希望に伴走し、芸術祭開始前から17年間活動してきました。元患者さんたちがお住まいだった家屋に作品を展示し、当時の生活の様子を知ってもらいました。アート作品として大島に70年生きてきた方の人生を立体絵巻として発表しました。苦しい生活の中、当時の若い人たちが自由な道を作るべく、北の山に細道を開拓した跡をアーティストが再発見・整備し、アート作品として公開しました。土道を踏み締め、遠くに見える四国や島々を眺めると、当時の元患者さんたちの体験が重なります。大島で

採れた柑橘を味わえるカフェを運営したり、子どもたちのサマースクールを毎年開催したり、大島を開く活動が続いており、多くの来島者が大島やハンセン病について触れ、理解を深めています。

このように瀬戸内国際芸術祭は、アーティストによる地域文化を内包したアート作品を展示することにより、訪れる人は土地の魅力や歴史を体験できるのです。もちろん表現の手法や土地の捉え方はアーティストによって多種多様であり、200あるアート作品ですが、同じものは一つもありません。毎回家族で訪れるリピーターやサポーターが多いのも、瀬戸内国際芸術祭の特徴です。

アートによる港の賑わい創出

私は長野県長野市出身です。20代半ばで四国・高松に移住しました。当時、地元香川のニュースは、「赤潮」「豊島産業廃棄物不法投棄」「大島への知事の慰問」などを取り上げていました。移住したての私は初めて聞く言葉が多く、大島に関しては知事が慰問に行く理由がわかっていませんでした。ニュースを何度も見て、だんだんと言葉の意味や、その理由がわかってきたのは2年後ぐらいのことです。美しい海だけど、現実には高度経済成長に伴う社会的な負の部分を負わされてきたということを知りました。その後、私は芸術祭の仕



「大島サマースクール」(Photo: Shintaro Miyawaki)



写真左：瀬戸内国際芸術祭2010開会式
(Photo: Osamu Nakamura)

写真右：大巻伸嗣
「Liminal Air -core-」
(Photo: Keizo Kioku)

事を通して、あちこちの島々へ通っていくのですが、どこも人口は減っていくのが体感としてわかりました。空き家が増え、小学校や中学校も統合され、休校・閉校になっていきました。

島々の人口減少とともに、フェリーや高速艇の便数も徐々に減っていきました。かつては24時間、四国と本州を結んだ宇高連絡船は、1988年の瀬戸大橋開通とともに廃止され、その後も民間事業者などがフェリーを運航していましたが、利用者数が減り便数も少なくなり、ついに2019年12月、109年続いた航路は廃止となりました。

時代とともに人の流れが変化し、元気がなくなっていた島々や高松港に明るさが戻ったのは、2010年7月の瀬戸内国際芸術祭の開会式でした。高松港の赤灯台の近くの岸壁が開会式の会場となり、そこにステージを置きました。式典では、瀬戸内国際芸術祭実行委員会会長の真鍋武紀知事(当時)が海を背に挨拶をし、その後ろに周辺の漁港から集まった

漁船が大漁旗をたなびかせて右へ左へと賑やかしてくれました。当初は30万人の来場を予想していた約100日間の会期でしたが、結果的には90万人近くの方が来られました。この時、高松港で多くの方を出迎えた作品が大巻伸嗣さんの「Liminal Air -core-」です。海と空をバックに2本のカラフルなポールが立ち、瀬戸内海へのゲートのようなものでした。この作品は、実は2つのポールの間に女性と男性のシルエットが隠されています。これまで島々へ渡る人たちの人数が宇野港が7割、高松港からが3割だったのに対して、初回の芸術祭では宇野港からが3割、高松港からが7割と変わりました。高松港は瀬戸内国際芸術祭のマザーポートとして歩み出しました。

2013年には、高松港近くの広場にテント村を展開し、バン格拉ディッシュから100人もの工芸職人さんやミュージシャンをお呼びして「ベンガル島」を繰り広げました。島々から帰ってくる人たちは、ベンガル島に寄って、職人さんと交流したり、工芸品を買ったりで



写真左：「ベンガル島」 写真右：「瀬戸内アジア村-タイファクトリーマーケット」 (Photo: Shintaro Miyawaki)



写真上：「高松港プロジェクト」建築：佐藤研吾 アート「そらあみ」：五十嵐靖晃

写真下：「高松港「食」のテラス」
(Photo 2点とも：Shintaro Miyawaki)

きます。高松港付近にお住まいの方も、この突然の村の登場に驚き、毎日通ってくれた方もいました。2016年は、タイに焦点を当て、タイから傘や布を作る職人さんに来ていただき、「タイ・ファクトリー」を繰り広げました。

芸術祭が始まって10年を過ぎると、港と島をつなぐ船の様子が変わってきました。各船会社のフェリーや高速艇がカラフルになってきたのです。水玉やストライプ、可愛いキャラクターなどがあしらわれ、目にも楽しい風景になりました。

これまで、高松港に賑わいを、人々が滞留できる場所をと、様々な検討を毎回してきましたが、本格的な取り組みが行われ始めたのが、2021年頃からでした。高松港のフェリー乗り場と高速艇乗り場の間の場所を使って、食事処を作ろうという試みでした。香川県港湾課などと調整し、車の出入りの許可や水道・電気の使用ができるようになりました。香川県内の飲食店の協力で、香川産品を使ったお弁当やサンドイッチなどを提供しました。地元企業の協力でベンチと椅子つきのパレットが置かれ、コロナ禍でもあったので全ての椅子を海の方に向けて設置したところ、大変な評判となり、このパレットは今でも継続

して設置され、来訪者や住民たちの憩いの場所となっています。

その流れを受け、2025年は大きく高松港で作品を展開しました。建築家の佐藤研吾さんによる港の憩いの場の創出では、地元庵治石を使ったベンチやテント、案内所ブースが登場しました。海側には五十嵐靖晃さんによる「そらあみ」のカラフルな魚網が旗めきました。

そして、夏、高松港のキャスルプロムナードの改修後の芝生に「ベトナム村」が出現しました。ベトナムからの工芸職人さんをお呼びし、ベトナム発世界中で人気のコン・カフェの出店やフォーやバインミーが食べられる屋台が現れ、島から帰ってきた人々が次々とベトナム夜市に溶け込んでいきます。一瞬、ここはどこ？ と錯覚すら覚える村の出現は、芸術祭の夏会期に新たな熱風を吹かせました。

港が元気になると島々も元気になる、島々が元気になると港も元気になる。港の賑わいは港を使う人のためにあるものです。瀬戸内国際芸術祭は、来訪者や住民などの立場を超えて、多くの人々を巻き込む面白さがあります。さらに瀬戸内国際芸術祭は一時的でも新しい風景を提示することができます。その結果、高松港の姿が少しずつ変わり、賑わいが増えていきました。これからも訪れて楽しい、居心地の良い、海を楽しめる港は、私が高松に移住してきたときからずっと続く憧れです。



「ベトナムプロジェクト：Cộng Moments～食と手仕事と雑貨のベトナムマルシェ～」(Photo：Shintaro Miyawaki)

伝統と革新の瀬戸内のみなとまちづくり

全県に海辺空間が広がる香川県 みなとを中心に人が回遊するまちづくり

GUEST

池田 豊人

香川県
知事



INTERVIEWER

山縣 宣彦

SCOPE
理事長

人を引き寄せるアートの力

山縣 私は2000年頃に高松港湾・空港整備事務所の所長として当地に赴任していました。ちょうどサンポート高松がオープンした頃でした。それ以降、みなととまちが一体となり、県全体が活性化して、あっという間に存在感が増してきた様子を拝見していました。

最初に香川県の印象についてお話しさせてください。やはり金子正則さん(知事在任期間1950年ー1974年)の存在です。6期24年間知事を務められて、その間、アートや建築分野の第一線で活躍していた猪熊弦一郎、丹下健三といった人物を招聘して今の県庁舎東館をはじめ積極的に地域づくりをされた。そのDNAが、直島の福武財団の活動や、北川フラムさんの瀬戸内国際芸術祭(以下、「瀬戸芸」という)に受け継がれ、今や香川は現代アートの聖地になったと思います。

池田知事は2025年で着任3年目になられます。まずは今の香川県をどう評価されているのか、お聞かせいただきたいと思います。

池田 やはり今の香川県の芸術に対する取り組みは、猪熊弦一郎さんの影響が非常に大きいと思います。東館が県庁舎本館として竣工したのが1958年です。戦後に建てた木造庁舎を建て替えることになり、最初は一般的な会社で設計を頼んだのですが、当時の金子さんはまだデザインの良し悪しに詳しくなかった。ですから親交のあった猪熊さんに東京で会って、「こういう設計で庁舎を建て替える」と相談したら、「丹下を紹介するから相談に乗ってもらえ。丹下はちょうど関西汽船に乗るから、おまえもそれに乗れ」と言われて、香川への帰途、船上で初対面。「金子です」と言ったら、「聞いている、わかった、おれが設計する」ということになって、東館ができたそうです。

山縣 そうだったんですか。



① 香川県庁舎東館(設計:丹下健三、1958年竣工)

2022年「香川県庁舎日本館及び東館」として国の重要文化財に指定

② 東館1階の壁画「和敬清寂」(猪熊弦一郎)写真手前の木製の家具は丹下健三のデザインによるもの

池田 丹下さんの建築に心酔されている安藤忠雄さんも、「東館は県庁舎として47都道府県の中でも突出している、非常に価値がある、民主主義の象徴だ」と言うのです。

大体において県庁舎は人を寄せ付けない威厳のようなものがありますが、東館にはそれがない。安藤さんは「人を呼び込む建築になっている」と言うのです。これは私の推測ですが、金子さんは東館の仕事で初めて建築やアートの力を認識されたのだと思います。ですから、これを県政の柱にしようと強く思われたと思うんです。

山縣 なるほど。

池田 丹下さんが香川県に縁ができたことで、岡本太郎をはじめいろいろな芸術家が香川に出入りするようになったようです。彫刻家のイサム・ノグチも猪熊さんとの縁で、香川の高級石材の庵治石^{あじいし}を紹介するということで来られています。ですから金子さんは、アートが持つ人やものを引き寄せる力を認識された。そういうことが今日まで連綿とつながって、香川にアートが根付いてきた。

私も香川に戻って、名前を挙げた人たちの作品や瀬戸芸などを見ながら思うことは、やはりアートには人を引き寄せる、人を呼び込む力があるということ。瀬戸芸に来るたくさんの人たちを見てその力を感じています。そして引き寄せられた人たちが、県内の会場となる島々や様々な土地の魅力に初めて気づく。それが瀬戸芸が注目されている原点にあると思っています。ですから、人に来ていただく動機づけとして、アートの力をこれからも活かしていきたいと思っています。

山縣 私の所長時代に一番問題になっていたことは、豊島の産業廃棄物問題でした。悪いイメージで有名になってしまいましたが、それも今や豊島と言えば豊島美術館があり、イメージが一新されました。

池田 これまで豊島もなかなか行く動機づけがありませんでした。しかし美術館ができたことで、実際に行ってみれば、こんなきれいな砂浜にごみを捨てていたのかといったリアリティが感じられます。また豊島の南側の備讃瀬戸航路では、海と航行する船が重なる景観を見ることもできます。

山縣 静と動が重なる魅力的な風景ですね。本当に瀬戸内海は世界でもナンバーワンと言っていると思います。これからもっと注目されると思いますので、瀬戸内海をもっと魅力的な場所にしていただきたいと期待しています。

港を中心にした日常的な人の流れをつくる

山縣 次にサンポート高松についてお聞きします。所長時代には岸壁、防波堤等と併せて、赤い灯台「せとしるべ」や階段式の護岸「せとシーパレット」などを整備して、十分に魅力的になったと思ったわけですが、その後アートが加わり、さらに進化した魅力的な場所になった。そして今回すばらしいアリーナができた。サンポート高松についてご自身としては、将来こんなことをしてみたいといった思いはありますか。

池田 最近よく思うことは、サンポート高松という場所は、宇高連絡船の遺産と呼べるような場所だということです。全国の港はその性格上どうしても街から離れています。しかし高松港は連絡船があった関係で鉄道駅が港の直近にあります。自ずと街にも近い。それが連絡船の廃止とともに埋め立てられて現在のベースとなる土地ができた。ですから、港と街が近く眺めも風情もあるという価値を高められる前提条件、潜在能力が非常に強い。これを活かしてサンポート高松を日本でも有数の港を中心になが日常的回遊する空間にできたらと思っています。



③ 高松港玉藻地区 ④ JR高松駅と駅ビル「TAKAMATSU ORNE（高松オルネ）」（2024年3月開業） ⑤ 徳島文理大学・高松駅キャンパス（2025年4月開学）



そのような中で、2025年2月に県立アリーナ「あなぶきアリーナ香川」ができました。ユニークな外観だけでも見る価値があると思いますので、宣伝していきたいと思います。またコンサートが開催される時は、開演前にアリーナ前のシーフロンプロムナードの緑地で海を眺めている方が多い。そのため、そこで

お茶や軽食が取れたらという声が大きくなっています。低層型のカフェレストランができれば、アリーナ+αで目的地ができて、海までの人の流れにつながると考えています。

もう少し範囲を広げますと、アリーナの西側にあるプールが今は廃止されて遊休地になっています。目の前はマリナーナとビーチですから、ホテルのような施設があるといいのではという意見が出ています。

一方で東側の玉藻公園前もキャスルプロムナードを整備して港湾緑地になっています。公園横に県民ホール「レクザムホール」があり、毎日のようにコンサートを開催していますが、ホールと緑地の間の空間にも飲食関係の施設が欲しいという声があります。ここから、さらに東側に国道フェリーの跡地があります。今は立体駐車場として使っていますが、それだけではもったいないという声もあります。

このようにサンポート高松地区の東西両側にももう少し開発の余地があると思いますので、港周辺に人の流れが日常



⑥「あなぶきアリーナ香川」(設計: SANAA、2025年2月開業)

的に広がればと考えているところです。

山縣 クルーズ客船専用岸壁も延伸する予定とお聞きしています。地方港湾では大型クルーズ船をコンテナやバルク用の岸壁に着けることがよくあります。当然、街からは遠く離れてしまう。一方、高松港は街の真ん中に岸壁がありますから街に歩いていける。このようなことができる港は限られていますから、クルーズ旅客が喜んでみなとまちを周遊できる工夫をしていただけたらいいと思います。

池田 港湾区域の緑地の活用に加えて、私の国交省時代の専門分野の道路も活用できないかということで、高松駅とサンポート高松間の4車線を2車線にして歩行者空間を広げ、土日は歩行者天国にして毎週末にイベントを行うような取り組みを併せて進めていきたいと思っています。

2つの港の機能を活かしていく

山縣 次は坂出市についてです。2019年(令和元年)に「坂出ニューポートプラン」を作りました。私は当時の市長から頼まれて座長をさせていただきました。お陰様で、そのプランに準じた形で長期構想ができました。

坂出港は工業の港で、高松港は商業、人流の港です。ですから、県全体として、この2つの港の機能をうまく活かして使うことになると思っています。

しかし坂出港は、土地がない、新しい場所がない等々、細かく見るといろいろ課題がありました。その解決のためにニューポートプランを作ったわけです。地元の皆さんは非常に前向きに考えておられます。一時期は番の州地区の工業団地・コンビナートの再開発で勢いはありましたが、これらが全て完売したこともあり、これからはもっと違う機能を期待する部分もあると思います。坂出港の管理者は市ですけれども、ぜひ県としても2つの港の機能をうまく使い分けながら、香川の発展につなげていただければと思っています。

池田 ありがとうございます。坂出はやはり瀬戸大橋のたもとですから、交通の便が抜群によく、坂出北インターチェンジも“フル化”します。“フル化”によって四国方面に向かう車の乗降が可能となり、松山、高知に行けるようになり、四国3県をにらんだ拠点性もさらに上がります。そういう意味から、番の州地区の企業用地としての価値は以前より上がっていると思います。その証拠として、完売した。交通の便の良さに加え、世界的な経済の変化が影響してい

と思います。今までは外へと出ていった企業が、外よりも内が良かった。やはり国内でものを作って、国外へ売って外貨を稼ぐことが日本の発展のモデルであることは、資源がない日本にとっては変わらないと思います。そういう意味から、やっと王道に戻ってきたと思っています。

そのような中で、番の州地区の価値はどんどん上がってくる。造船も元気で、日本の基幹産業の1つとして注文も伸びている。それから新しい産業立地としての価値も出ている。さらに水素エネルギーの基地としての価値も出ている。これらの方向から坂出は、今後も企業の立地のニーズが高まってくると思います。それに伴って坂出港の機能向上のニーズも高まってくると思います。時間はかかると思いますが、長期的な将来を見据えて、今から着実に一歩ずつ進めていかなければいけないと考えています。

四国の交通の要衝としての高松空港

山縣 次に高松空港の話です。本日も高松空港を利用して来ましたが、国際線がずいぶん増えて充実しています。新たにできた台中路線は大変珍しい路線だと思いますが、誘致に関して何か秘策のようなものがあるんですか。

池田 これは先輩の方々のお力です。台湾に何度も訪問して台中のエアラインを誘致された。半端じゃないですね。

国内線では、昔は四国の玄関口は高松といわれていましたが、その価値が相対的にやや下がったところがありました。しかし、国際線から見ると高松に降りれば四国4県どこにでも行ける。広島や関西方面にも行けるので便利だと言うわけです。加えて瀬戸芸や瀬戸内海の魅力が海外から注目されたことで、コンテンツと交通の要衝としての魅力が高まり、台湾のエアライン就航が火付け役になって広がったのではないかと思います。

山縣 瀬戸芸のようなイベントがあり、自然はきれいだし、食べ物もおいしいし、おもてなしのマインドもあるしということで、火が付いたということなのでしょうね。

池田 そうだと思いますね。2023年のG7香川・高松都市大臣会合で、私もメンバーの皆さんを直島へご案内しました。そのときに皆さんが一番喜んだのは船旅です。高松港から直島に行く船の甲板にお連れしたら歓声が上がった。特にお連れのご婦人からはアメージングとか、スプレンドイドとか、こんな景色は見たことがないと。

山縣 なるほど。やはりすばらしいですね。そのように海

外の方に非常に人気を博すのはいいことだと思います。

一方で、空港から市内に入るアクセスが気になります。真っすぐで良い道路なのですが度々信号で止められる。ですから、現在計画が進められている高規格道路を早く整備していただきたいと思いました。

池田 おっしゃる通りで

す。空港通り(国道193号)ができた当初は今よりも信号が少なく空港まで1本道で4車線もありいい道路ができたと思っていました。しかし、利用者のインフラに対する要求もだんだんレベルアップするため、今は信号で止められていると感じてしまいます。

松山空港も環状道路でつながりました。そうすると、ますます高松空港の信号の印象が強くなります。早く空港直結の道路を整備しないといけない。インフラはこれだよという終わりがありません。私はよく「ウサギとカメ」に例えるのですが、インフラはカメでいくべきではないか。ゆっくりでもいいが、一歩ずつ確実にやっていくべきだと思います。

山縣 空港と高規格道路が直結すれば、さらに空港機能も評価され、他の路線も増えて、良い循環ができると思います。

最後に、池田知事が考える今後の抱負や、次に何をするかお考えがあればお聞かせいただけますか。

池田 香川県は全国で最もコンパクトな県ですから、県内も移動がしやすいのが良いところです。今はサンポート高松地区が起爆剤となって、人も集まってもらえるようになりました。その人たちが県内の東西両側にうまく流れるような工夫を考えていきたいと思っています。香川県は全県に海辺空間が広がっています。その海辺空間も東西でまったく違う顔を持っています。もっと人の流れを作りその異なる顔を見ていただきたい。そのようなことに取り組んでいきたいと思っています。

山縣 本日はどうもありがとうございました。



伝統と革新の瀬戸内のみなとまちづくり

歴史ある交流の拠点に
官民挙げて新たな魅力を創出

国土交通省 四国地方整備局 高松港湾・空港整備事務所

現代アートの聖地として知られる直島をはじめ、瀬戸内海の島々に国内外のアーティストの作品が点在する香川県の県都高松市。近年では、国内はもとより海外でも観光地として大きな注目を集め、この地を訪れる人も増えている。その玄関口である高松港のにぎわいの原動力となったプロジェクトが「サンポート高松」だ。高松港の玉藻地区を中心に様々な施設の整備が行われた。いったいどのようなプロジェクトなのか。国土交通省四国地方整備局高松港湾・空港整備事務所の加藤所長に伺った。

宇高連絡船の廃止を契機に計画が浮上

香川県の県都高松市は、1588年に藩主・生駒親正が日本三大水域の一つと言われる高松城を築き、同時に内町港を整備したことに始まり、古くから本州との交流拠点として港とともに発展してきた。

その玄関口である高松港は、香川県の中央部よりやや東に位置し、本州や離島を含めた海上交通の要衝として、地域の人流及び物流の拠点を担ってきた。特に玉藻地区については、本州・瀬戸内の離島を結ぶフェリー・高速船やクルーズ船が寄港しており、直背後の充実した公共交通機関

や賑わい空間とともに人流拠点が形成されている。

そんな中、1988年の瀬戸大橋開通に伴う宇高連絡船の廃止を契機に、高松港の再編計画が浮上した。その結果、高松港玉藻地区を中心に港湾と都市が一体となった四国有数のプロジェクト「サンポート高松」が展開された。

「サンポート高松は、国土総合開発事業調整費による旧4省庁（国土庁、通産省、運輸省、建設省）による『備讃地域整備計画調査』で構想されました。その後、実現に向けて港湾、都市サイドあるいはこれらを統合する立場で様々な検討がなされ現在に至っています。港湾サイドでは、『ポートルネッサンス21調査』（旧第三港湾建設局）によって総合的な港湾空間の整備を図るための具体施設の抽出と計画フレーム、各施設の配置等とともに、代表的な上物施設に対して民活法による事業化等の検討を行い、香川県が実施する『高松港港湾計画調査』との連携を図りながら、具体的な施設整備計画として1988年2月改訂の『高松港港湾計画』に位置づけられ、事業化されました」

1988年度から事業化が始まり、直轄港湾施設整備は、2000（平成12）年度に完了した。ポートルネッサンス21調査で検討された施設のいくつかは、その後の経済状況の変



国土交通省 四国地方整備局
高松港湾・空港整備事務所 所長

加藤 訓生

サンポート高松：開発の経緯

1910年（明治43年）	高松宇野間の鉄道連絡船が就航
1988年（昭和63年）	瀬戸大橋開通により、鉄道連絡船が廃止 玉藻地区再開発の旅客船埠頭計画を策定
2001年（平成13年）	サンポート高松一部オープン 離島フェリー乗り入れ開始
2004年（平成16年）	サンポート高松グランドオープン 高松シンボルタワーなどオープン
2006年（平成18年）	高松サンポート合同庁舎完成
2017年（平成29年）	高松サンポート合同庁舎南館完成

サンポート高松における港湾整備事業

旅客船ターミナル整備事業	
事業期間	1988年度（昭和63年度） ～2001年度（平成13年度）
構成施設	岸壁（水深10m）、 岸壁（水深7.5m）、岸壁（水深6m） 防波堤等 浮桟橋、航路泊地（水深10m）、 臨港道路、緑地等 ※下線は直轄が整備
玉藻地区緑地整備事業（香川県事業）	



図左：ポータルネッサンス21調査における高松港玉藻地区開発構想図（出典：旧運輸省第三港湾建設局作成）。図中：高松港玉藻地区港湾整備事業（出典：国土交通省四国地方整備局資料）。写真右：サンポート高松地区全景（写真提供：香川県土木部港湾課）

化などにより実現しなかったが、基本的な考え方は現在でもサンポート高松の底流に脈々と息づいている。

機能性＋景観に配慮した港湾施設

サンポート高松の基本コンセプトは、「瀬戸の都高松21世紀の城（新玉藻城）づくり」であり、海を活かすこと、拠点として生きること、アイデンティティを創ることである。これに基づいて、まちの骨格、活力、表情をつくることを基本方針とした。

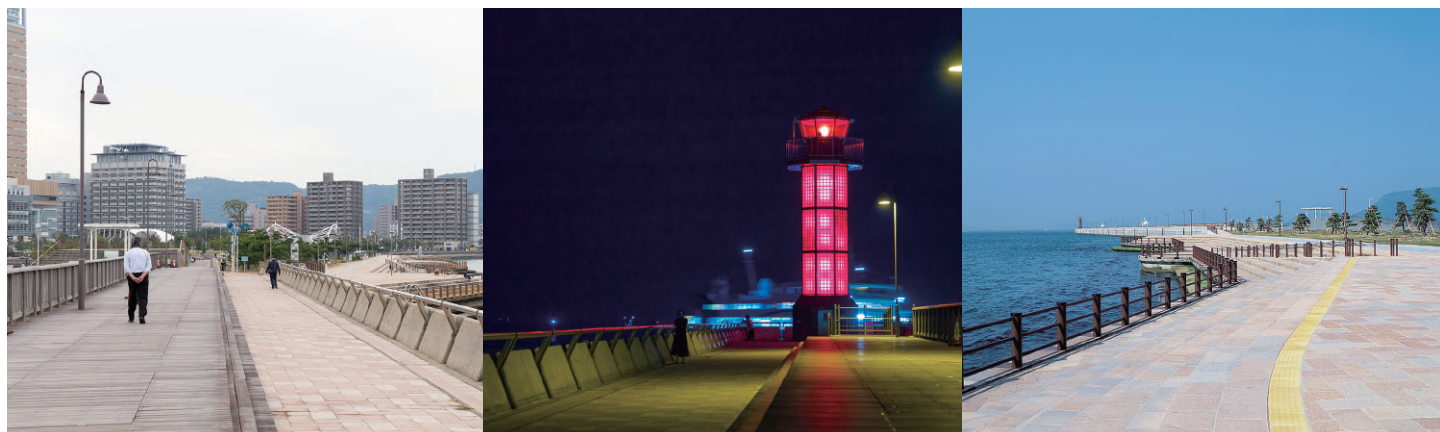
具体的な直轄港湾施設整備事業としては、玉藻地区に旅客の輸送需要に対応した旅客船ふ頭、水域施設、外郭施設、ポートサービス船等のための小型船たまりなどが計画された。このうち旅客船ふ頭については1998年に2万トン級岸壁として整備されたが、2011年に現在の5万トン級岸壁に拡充され、多くのクルーズ船が寄港している。

「直轄事業で整備した防波堤、護岸、岸壁は、いずれも新しい水辺の魅力ある空間となるように機能性のみならず、

親水性、環境などの景観に配慮しています。また、従来の港湾施設とは違い昼夜を通して開放されることから、港湾施設全体にわたって照明施設、点字ブロック、誘導ブロック、バリアフリーなど安全面に配慮すると同時に構造や舗装材などのディテールを高質化しています。さらに、旧防波堤の撤去材をリサイクルし、舗装石材、防舷材に輸入製品を使用するなどコスト縮減にも努めました」

例えば、防波堤は本来の機能の他に港内側、港外側の海水が交換できるように、防波堤本体に透過式スリットケーソンを採用し、港内側の水質浄化に努めている。また、防波堤上面は、海上の散策路として利用できるように、御影石、ボードウォーク、バリアフリーにも配慮し、夜間でも安全に利用できるように照明施設を配置している。

一方、サンポート高松のランドマークとなっている高松港玉藻防波堤灯台、通称「せとしるべ」は、世界初のガラス灯台で、高さは14m。赤い灯台は灯塔がガラスブロックできており、内側に貼った赤いフィルムと光源により塔全



写真左：遊歩道として機能するように御影石、ボードウォーク、照明灯を整備した防波堤上面。写真中：塔全体が輝く灯台「せとしるべ」。写真右：「三建ブロック」を採用した親水性護岸



岸壁の木製の車止めをベンチにして港でくつろぐ人々



写真左：高松シンボルタワー展望台から望む高松港。写真右：同展望台から望む高松港朝日地区周辺

体が輝いている。

「護岸もユニークです。平面形状は、波をイメージした柔らかな曲線と直線の組み合わせとなっていて、一般市民が水際まで近づくことができます。瀬戸内海への眺望が確保されるように、階段式として護岸の天端を低く抑えるため、階段部に消波機能を持つ『三建ブロック』(旧第三港湾建設局が開発)を採用しました。このブロックは水平通水部から進入する波と上部空間から進入する波が衝突する相互干渉作用により、海水の越波量を低減するもので、特許を取得しています。また、舗装部についても、目前に広がる瀬戸内海と調和し、地元に関わりの深い素材として御影石張りとして、バリアフリーにも配慮しました。前面の手摺りの色は市民アンケートを採用。愛称募集によって『せとシーパレット』に決定しました。背後には、県が噴水、展望スペース、休息施設を整備、塩害に強い黒松を植えて高松城との調和を図っています」

岸壁についても、旅客船やフェリーで訪れた人々に優しさや温かさを感じさせるターミナル空間を演出し、遊歩道としての利用も考慮して、舗装部はぬくもりを感じさせる茶系のレンガを使用。車止めも、ぬくもりのある材質感を大切にして、大型の木製とし、ベンチとしても使用可能とした。照明も、岸壁全体を照らす照明灯の他、水際からの転落を防止するために、水際表示ライト(太陽電池)を埋め込み式で設置した。このようにサンポート高松の港湾施設には、利用者のために細部に渡るまで様々な工夫が施されている。

官民挙げての再開発が賑わいをもたらす

サンポート高松エリアでは、直轄事業以外にも、国や県、市、民間などが一体になった再開発が行われた。海陸交通

のターミナルから、ホテル、広場、プロムナードなどが整備され、香川観光のスタート地にふさわしいエリアとなっている。ここにある四国最大の高層ビル「高松シンボルタワー」は、国際会議場などの公共施設と民間の商業施設が共存し、子供から大人まで楽しめるレストラン&ショッピングモールの「マリタイムプラザ高松」が人気スポットとなっている。歩行者専用道路や多目的広場ではマルシェなどのイベントが行われ、週末は大変な賑わいを見せている。

「1999年と2000年に一部完成した港湾施設の一般開放イベントが行われましたが、それにあわせてアンケート調査を実施しました。アンケートのキーワードは景観設計時の『海との一体性』『美観性』『デザイン性』『歩きやすさ』などです。その結果、全体の印象としてはサンポート高松に対して概ね好意的な評価を得ています」

サンポート高松エリアには、四国地方整備局など国の行政機関のほとんどが集中する合同庁舎がある。最近でも、2025年に高松シンボルタワーのそばに、ワールドクラスの県立アリーナ「あなぶきアリーナ香川」が誕生するなど、



あなぶきアリーナ香川と高松シンボルタワー

同エリアはますます活況を呈している。

高松港のさらなる魅力アップを目指す

高松港では、この他にも様々な整備が進められている。「朝日地区は物流の拠点で、外貿コンテナ航路、内貿コンテナ航路を有するとともに、神戸港へのフェリー航路が就航しており、物流の拠点として地域の基幹産業を支えています。このため、船舶の大型化、ふ頭再編による輸送の効率化、大規模地震時の防災拠点確保のため、3万トン級貨物船が着岸できる耐震強化岸壁を整備しました」

また、現在、高松港―神戸港を結ぶフェリー岸壁の大型化と耐震化も行っている。この「ジャンボフェリー」は、1日4便(2隻体制)で就航し、一部の便を除いて小豆島(坂手港)を経由する。旅客はもちろんだが物流についても、大型クレーン、水族館用の大型水槽、冷凍うどんや冷凍ポテトコロケといった冷凍食品など高松で製造された多彩な貨物を神戸港に運んでいる。フェリーの利用企業は、高松市内だけで50社以上、香川県内で約580社に上る。近年は、トラックドライバー不足により陸上輸送から海上輸送に切り替える荷主が増加しているだけに、今後ますます重要な役割を果たすと考えられている。なお、ジャンボフェリーは、2022年10月に32年ぶりとなる新造船「あおい」が就航。輸送力と快適性が大幅に向上するとともに、燃費性



ジャンボフェリーの新造船「あおい」と整備中の岸壁



海岸事業によって新たに整備された海岸堤防

能や安全性も向上している。

また、昭和40年代に築造され老朽化が著しい既設の海岸護岸について、海岸保全施設としての防災機能の向上を図るため工事を進めていたが、2004年の台風16号の来襲時に高潮によって大規模な浸水被害が発生したことから、高潮に対しても住民の安全・安心な暮らしを確保できるように設計条件を見直した上で改修を行った。

「高松港の持つポテンシャルの高さを改めて認識する毎日です。近年、香川県は観光地として注目が高まっており、外国人観光客も大幅に増加しています。3年に一度開催されている『瀬戸内国際芸術祭』も、世界的に注目を集めています。アート会場の多くは島嶼部ですが、港湾が交通結節点として機能し地域経済にも貢献しています。今後は島嶼部だけでなく本土側のエリアでも新たな観光スポットを開発するなど、官民挙げて高松港のさらなる魅力アップの施策を進めていきたいと思います」



瀬戸芸開催時に多くの人で賑わう離島行きフェリー(撮影:2022年)



2025年8月30日、高松港に初入港した「飛鳥Ⅲ」

伝統と革新の瀬戸内のみなとまちづくり

安心と安全とともに楽しく憩うみなとへ 人々に賑わいを誘うプロムナード整備

香川県 土木部 港湾課

四国の海の玄関口として、本州や離島との海上交通の要衝として重要な位置にある高松港。工業港、商業港としての機能はもちろん、近年は3年毎に開催される瀬戸内国際芸術祭(以下、「瀬戸芸」という)の会場となる島々への出発点として、国内の観光客はもちろん海外からの訪日客も多く訪れている。

その高松港玉藻地区と背後圏都市を一体的に整備したのがサンポート高松である。JR高松駅を中心とした区域を、国による港湾施設整備とともに、国や県、市、民間が一体となった四国の中枢管理都市としての都市拠点づくりが行われ、2004(平成16)年にグランドオープン。このみなとまちづくりの取り組みは四国数々のプロジェクトとなった。そこで香川県土木部港湾課に、近年の港湾整備状況等について話を伺った。

整備が進むサンポート高松地区

玉藻地区では、高松と各離島を結ぶフェリー、高速船等が1日66便が就航し、クルーズ船は近年寄港数が大幅に増加し賑わいを見せている。一方、背後の都市部では行政機関が入る合同庁舎をはじめ、商業・集客施設、ホテル、

緑地公園、広場等が整備され、経済活動のみならず人々の憩いや賑わいの場としても機能している。

特に2024年に入り、3月にJR高松駅の駅ビル「TAKAMATSU ORNE(高松オルネ)」が、2025年2月には県立アリーナ「あなぶきアリーナ香川」がそれぞれ開業。4月には徳島文理大学が移転開学するなど、同地区の再開発はさらに進み、今後も2027年開業予定で外資系高級ホテルが着工中だ。

みなとに人を誘うプロムナードづくり

より多くの人々が集い賑わう環境づくりが整う中で、その人の流れを安全に、かつサンポート高松地区とともに広く周辺地域へと波及させる仕組みが必要となった。現在、都市部において歩行者優先のプロムナード化を進めている中で、それに連携して港湾部でもプロムナードの整備が行われた。どのように整備が進められたのか。

「一から新しく整備するのではなく、既存のものを活用して整備を進めました。そのためにそれらを活用しやすいように条例の一部を改正して行いました。いわゆるウォーカブルなみなとづくりを行い、都市部に集まった人をウォー

香川県土木部港湾課
課長

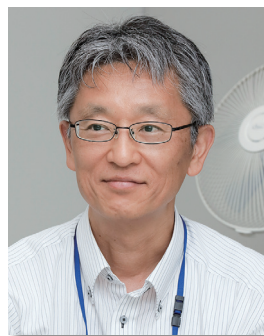
重成 恭輔

香川県土木部港湾課
副課長

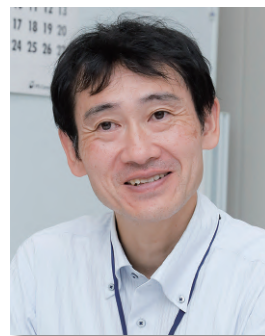
宮西 正博

香川県土木部港湾課
課長補佐(総括)

川田 康裕

香川県土木部港湾課
課長補佐

三井 憲一郎

香川県土木部港湾課
課長補佐

大西 一賢



サンポート高松全景と同地区プロムナード (赤字)



JR高松駅ビル「TAKAMATSU ORNE」



公共・商業施設が入る高松シンボルタワー

ターフロントに誘導し、周遊する中で、港の風景を見て寛いでいただければと思います」

整備されたプロムナードは4つのエリアに分かれる。県立アリーナ沿いの緑地帯にできた『シーフロントプロムナード』、大型旅客船・フェリー・高速船用岸壁に続く『ハーバープロムナード』、玉藻公園の海側の散策導線となる『キャッスルプロムナード』、さらにショッピングモールに続く『北浜プロムナード』だ。

①シーフロントプロムナード

シーフロントプロムナードは、県立アリーナの海側に位置する。2008年に緑地として整備されたものがベースだ。

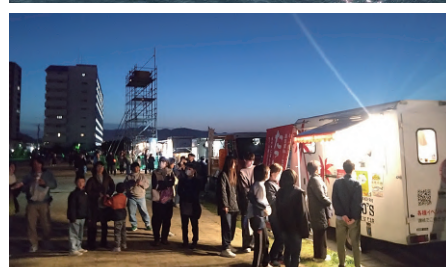
「ここで行ったことは、ハードの整備よりも利活用のための制度づくりがメインになります。アリーナでイベント等

が行われる際に合わせて活用できるように条例を改正し、ここを民間の事業者に貸し出して、飲食の提供やイベント等に活用ができるようにしました」

②ハーバープロムナード

高松港の第1浮桟橋客船乗り場からクルーズ客船専用岸壁までの港湾沿いに整備された全長約630m、広さ約2.2haの港湾緑地がハーバープロムナードだ。高松港では、フェリー、高速船の利用者数が昨年218万人で全国4位。主な乗降客は島からの通勤・通学利用になるが、インバウンドの増加や瀬戸芸開催の年は利用者数が急増するため、ハーバープロムナードも有効な活用方法が求められた。

「緑地自体は再開発時に整備していましたが、2023年のG7香川・高松都市大臣会合開催をきっかけに、少しずつ手を入れてきています。瀬戸芸開催時には、フェリーや高速艇で小豆島や直島に行く観光客が非常に多く滞留しますの



写真上：
シーフロントプロムナード (延長約250m)

写真下：
イベント開催時に同プロムナードに出店したキッチンカー



あなぶきアリーナ香川の屋根を使ったプロジェクションマッピング

で、船が到着するまでの時間も楽しめるように、ハーバープロムナードにキッチンカー『G7Cafe シルバー』とパークレットを配置しています」

③キャッスルプロムナード

史跡高松城跡玉藻公園前に位置するのがキャッスルプロムナードだ。公園の歴史的な景観と一体感を持たせた緑地を整備することで、海上から見た景観にも配慮している。

「こちらはアリーナでのイベント用の機材運搬のトラックやバスの駐車スペースとしても活用できます。音楽イベント時などでは、大型トラックが何台も来るため、広いスペースが必要なのです。また、ここでのイベント開催も可能で、2025年の瀬戸芸の際には、『ベトナムプロジェクト』を開催、ベトナム料理や雑貨の屋台が並び、音楽・舞踊を楽しめる場となりました」

④北浜プロムナード

北浜プロムナードは、北浜町の海沿いに続く散策路だ。



写真上：
ハーバープロムナード
(延長約630m)

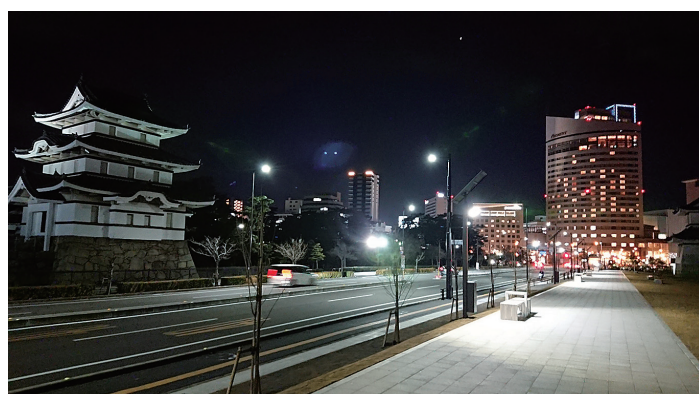
写真中・下：
同プロムナードに設けられたオープンエアの休憩スペース。イベント時に賑わうキッチンカー「G7Cafeシルバー」

東屋やベンチもあり、フェリーが入出港する姿も観察できる。背後には観光スポットとして若者に人気のショッピングモール「北浜アリー」がある。これは民間主体で既存の古い倉庫街をリノベーションした商業施設で、カフェ、レストラン、結婚式場、雑貨屋や洋品店などが立ち並ぶ。

賑わいのみなとづくりへのシフトチェンジ

イベント等をきっかけに時間をかけて徐々に整備してきたという高松港のプロムナード。完成を迎えるにあたって注力したのは、大規模なハード整備というよりは関係各所と連携し足並みを揃える中での、より使い勝手の良い制度づくりだったという。港湾整備事業だけでなくサンポート高松地区での県立アリーナ等の整備が進められる中で、みなとまちづくりをどう融合し、再開発事業を進めたのか。

「一番気を遣った点は、整備自体より職員自身の意識改革だったかもしれません。港湾整備は安全性が第一でしたから、まちとみなとの一体感を高め、賑わいを波及させるために、安全性を保ちつつも、いかに楽しく賑わいある整備を行うべきか。県立アリーナ等を起爆剤として、サンポート高松地区全体を盛り上げ、日常的に人が集まり、周遊で



写真上：
キャッスルプロムナード
(延長約450m)

写真中：
同プロムナードの夜景

写真左：
瀬戸内国際芸術祭2025
ベトナムプロジェクト

きる場所となることを意識して議論を重ねました。

今後も、港湾緑地等の更なる利活用を進めることとしており、飲食や商業施設などの不足しているにぎわい機能の追加配置や整備運営手法について検討しています」

大型クルーズ・スーパーヨットの誘致に向けて

今後の港湾整備計画は、まずクルーズ客船専用岸壁の整備が挙げられる。現在の5万トン級対応の岸壁から、将来的には10万トン超級の大型クルーズ船を受け入れられる11万トン級対応の岸壁に整備する予定だ。現時点では10万総トン超級のクルーズ船は、コンテナなどを取り扱う朝日地区の岸壁に接岸しているが、市街地から距離がある、物流関係の事業者との事前調整が必要となるなど制約が多い。さらなるクルーズ誘致には客船専用岸壁の機能拡充が必要不可欠といえる。

「サンポート高松のクルーズ客船専用岸壁は、街に近く下船後の鉄道やバスなど公共交通とのアクセスも抜群で、国内外のクルーズ旅客には大変好評です。2025年7月時点で、クルーズ寄港は2019年のコロナ禍前25回に迫る21回を予定しており、今後さらなる寄港が期待されています」

また、玉藻地区に隣接する西浜地区にはマリーナがあり、プレジャーボートやヨットを受け入れている。定期的にヨットレースも行われ、利用ニーズの高まりから、さらなる安全性確保のため、小型船溜まりの静穏度を確保する防波堤の計画もある。

さらに、スーパーヨット用岸壁も整備。係留用に関するインフラとして電力や水を供給する設備を整える。

「以前、社会実験的にクルーズ客船専用岸壁をスーパーヨットに開放したのですが、複数回来港してもらって好評でしたので整備に踏み切りました。神戸港でも2027年スーパーヨット岸壁の整備予定があるので、神戸から高松へと瀬戸内海クルージングで高松港へも立ち寄ってもらえるようになればと期待しています」



北浜プロムナード (延長約320m)

災害避難路ならびに物資輸送の役割も期待

一方で、忘れてならない高松港の機能が防災拠点としての役割だ。防災機能強化港である高松港は、「香川県地域防災計画」において、大規模災害時における住民の避難、物資の応急輸送の一次物資輸送の拠点としての役割を担っているほか、離島などの2次拠点への物資輸送の役割も担う。また、南海トラフ地震等の発災時には、高松港BCPに基づき、海上輸送の拠点としての役割を担う。

「玉藻地区にある高松サンポート合同庁舎には国の現地対策本部が設置予定で、四国地方の防災拠点としての役割が求められています。大規模災害時には、高松港を起点に、四国・中国地方への緊急避難及び緊急物資輸送等に対応するために、岸壁の耐震化工事を始め、様々な対策が求められています」

現在、朝日地区には耐震岸壁F地区が1バース整備済みだが、同C地区にも整備予定があり、玉藻地区ではフェリー岸壁も耐震化計画が進む。

「香川県では2015年に香川県地震・津波対策海岸堤防等整備計画を策定し、30年計画で進めています。現時点では10年目の第Ⅰ期計画が終わり、2025年度から第Ⅱ期計画に入ります。楽しく賑わいあるみなとづくりの一方で、安全・安心な港整備はしっかり着実に進めなければならないと考えています」



JR高松駅周辺の賑わい



高松港に寄港するクルーズ船と就航するフェリー

伝統と革新の瀬戸内のみなとまちづくり

空港から人と街を元気に 高松空港が目指す四国瀬戸内No.1

高松空港株式会社

現在地から約10km北の市街地にあった旧空港から移転し、1989年12月に開港した高松空港は、国が設置し、現在は高松空港株式会社が管理・運営している空港だ。

2016年9月、国管理空港における民間委託プロジェクトとして、「高松空港特定運営事業等」の募集要項が公示。三菱地所株式会社を代表企業に、大成建設株式会社、パシフィックコンサルタンツ株式会社、シンボルタワー開発株式会社から構成される「三菱地所・大成建設・パシコングループ」は、これに応募し、優先交渉権を獲得。翌2017年9月には空港運営事業のためのSPC「高松空港株式会社」を設立し、同年12月、旅客ビル施設等の運営を開始し、2018年4月より滑走路の管理等を含めた空港全体での一体的な運営を開始した。

高松空港の現状や地方空港ならではの課題について、高松空港株式会社の小幡代表取締役社長に伺った。

国際線比率が高い地方空港

高松空港は開港当初、国内線が様々な都市に就航し、最盛期の1998年には10路線が発着していたが、2025年現在の国内路線は羽田、成田、那覇の3路線の就航となってい

る。現状に至った原因の一つは、1988年の瀬戸大橋と1998年の明石海峡大橋の開通があった。

『4時間の壁』という表現があります。4時間を超える移動では航空機利用が優位に立ち、4時間以下では鉄道利用が優位になる。本州四国連絡橋の道路・鉄道ルートが開通したことにより、この4時間の分岐点の影響で特に地方間を結ぶ国内線が徐々に撤退していきました」

このような国内線が伸び悩む状況の中で、当時の香川県は他県に先駆けて国際線の誘致に動いた。1992年のソウル線を皮切りに、2011年の上海線、13年に台北線、16年に香港線が開設。国際線は4路線となり、2020年の新型コロナウイルスの移動制限で一時的に全便が欠航を余儀なくされたが、コロナ禍明けの2022年以降、利用客数は順調に回復し、現在も増加傾向にある。

高松空港の特長を示す数字がある。国土交通省空港管理状況調査による全国空港利用者数(2023年度)だ。

「全国97空港の中で、『国内線+国際線』の順位は18位、『国際線』のみの順位は9位になります。8位以上には成田、羽田、関西、福岡、中部、新千歳、那覇、仙台が並んでおり、その中で9位ということは、それだけ国際線比率が非



高松空港株式会社
代表取締役社長

小幡 義樹

高松空港	
所在地	香川県高松市香南町岡1312番地7
運用時間	7:00~22:00
国内定期便	羽田、成田、那覇
国際定期便	ソウル、上海、台北、台中(定期チャーター便)、香港
開港日	1989年12月
空港の種類	国管理空港(運営権者 高松空港株式会社)
滑走路	長さ2,500m×幅60m
空港面積	154ha
スポット数	大型ジェット機用×3、中型ジェット機用×3、小型機用×18



ターミナルビル内の案内板。
「うどん」は別表記に

常に高い地方空港であるといえると思います」

高松空港が選ばれる理由

国際線は全て東アジアの路線だ。現在はほぼ9：1の割合でインバウンドの旅客で、近年は団体旅行から個人旅行へと旅のスタイルにも変化が見られるという。

「国ごとに濃淡はありますが、各路線の開設当初は団体旅行が多く、到着後は現地旅行会社が手配した観光バスで、団体に観光地や飲食・宿泊施設へと移動するパターンでしたが、コロナ前から少しずつ個人旅行が増えつつあります」

海外の航空会社に高松が選ばれる理由の一つは利便性にあるという。個人旅行が増えたことで行動は多様化し、空港到着後は各々バス、タクシー、レンタカーを利用して、高松市内をはじめ四国各地へと自由に移動している。JR高松駅まで移動すれば、駅を起点に鉄道も利用でき、駅から徒歩圏内にある高松港から船舶で島に渡ることもできる。本州を経由せずに四国各地を楽しめる、このような交通の利便性が評価されているという。

「さらに瀬戸内海に広がる多島美の自然の景観があります。これは日本人が考える以上に海外の旅客には魅力的に映っているようで、非常に高く評価されています」

また3年ごとに開催される瀬戸内国際芸術祭(以下「瀬戸芸」という)は、今年2025年が開催の年になるが、瀬戸芸に関しては、すでに台湾や香港からの旅客にはプロモーションが不要なほど浸透しており、欧米も含め多くの外国旅客が訪れているという。

一方、国内旅客については、瀬戸芸の人気に加えて、25

年2月のあなぶきアリーナ香川のオープンに伴い、大きなイベントが開催されるたびに旅客数が増える傾向が見えるという。緩やかな曲線でデザインされた特徴的な外観のアリーナは、アート作品として瀬戸芸の展覧作品の一つとしても紹介されている。

「日本で建築を学ぶ学生は、全国の著名な建築物を見て回るそうですから、そのような建築に興味のある人たちにも来てもらえればと期待しています。見るだけでも価値のあるすばらしい建築物ができたと思っています」

進む国際線エリアの増改修

高松空港では運営の民間委託後、すぐに香川県とパートナーシップ連携協定を結び、その中で地元自治体、経済・観光団体とともに高松空港エアライン誘致等連絡協議会を設置した。

「海外の新規路線の誘致や増便の要請といったポートセールスは、やはり地元自治体と一緒にいった方が話がスムーズに進むこともあります。そのようなこともあり、地元の皆さんと今後の空港運営などに関してコミュニケーションを取り合いながら、方針を確認し合う場を設けています」

直近のポートセールスの成果としては、今年2025年7月に締結した高松空港と台中国際空港との連携協定だ。今後は、就航する高松—台中線の利用促進、両空港周辺地域の交流拡大を目的に、定期的な情報交換や両地域への誘客促進につながる共同プロモーションを実施していく。

「我々にとって5つ目の路線となる台中線は、まだ日本の空港にはそれほど多くありません。ですから連携協定をきつ



高松空港旅客ターミナル



高松空港3階展望デッキより滑走路を臨む

かけに、両地域の皆さんにお互いの地域のことをご理解いただき、双方の需要を喚起できればと思っています」

現在、高松空港では、国際線エリアを主とする旅客ターミナルビル増改修プロジェクトが進行している。

高松空港の国際線旅客数は、これまで2018年度の32万人が過去最高だったが、コロナ禍明けの昨年2024年度は48万人となり、18年度比1.5倍になった。旺盛なインバウンド需要を踏まえ、受入機能の強化と空港サービスの向上及び利便性・快適性の向上が必要になった。

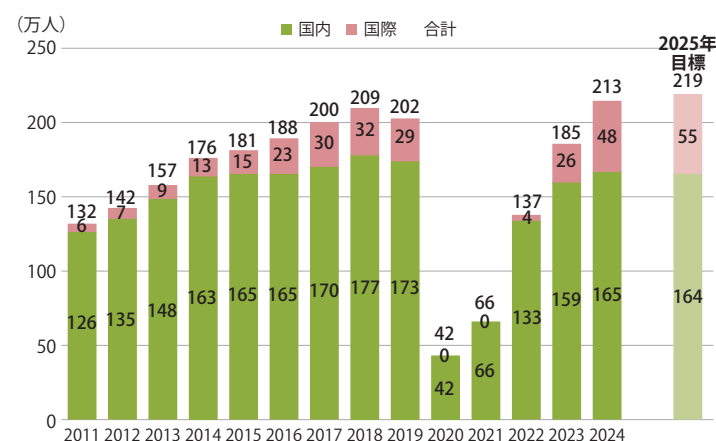
「国際線が5路線となり、現在時間帯によっては同時に2便が到着することもあります。また遅延の影響を受けて3便が重なる時間帯も発生している状況です。これに対応するために国際線の受入機能の強化を図るために工事に着手しているところです」



写真上：
高松空港と台中国際空港との連携協定締結を記念してターミナルビル2階の国内線出発ロビーで開催された台湾写真展



写真下：
同国際線出発ロビーには連携協定締結を説明するパネルを展示。同様の展示は台湾側でも開催し、両空港共同でプロモーションを実施



高松空港の国内線・国際線利用者数の推移
出典：国土交通省「暦年・年度別空港管理状況調査」

コロナ後いち早く国際線を再開

現在、全国の空港で共通の課題は、航空燃油の供給不足と、グランドハンドリングにおける人材不足の問題だ。

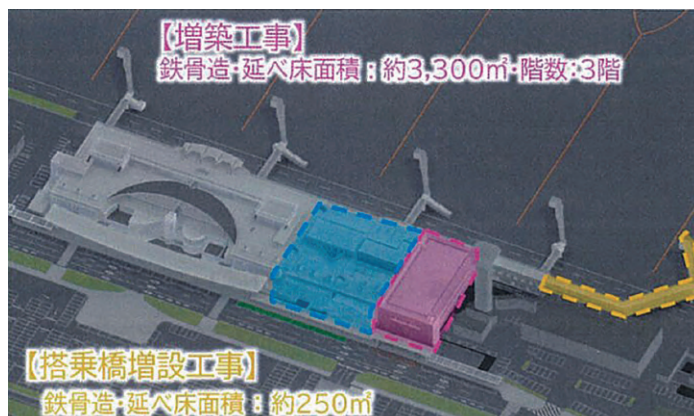
高松空港の燃油の供給に関しては、国土交通省と資源エネルギー庁の尽力により解決を見たという。

一方のグランドハンドリングに関しては、コロナ禍の行動規制がある中で、再開を見越して検疫所に加えグラハンを担う会社と密にコミュニケーションを図り準備を進めていたという。

「2022年6月に岸田前首相の仙台、広島、高松の3つの地方空港で国際線を再開するとの発言を受けて、すぐに動いていただき、すでに離職した人を呼び戻すだけでなく、専門学校の卒業生などを対象に募集を行い、人材を確保していただきました。また保安業務を担う警備会社も同様に動いていただいた。そのおかげで地方空港としてはいち早く2022年11月にソウル線を再開することができました」

人材確保を含め、なぜ国際線を速やかに再開することができたのか。そこには香川県民からの非常に大きい期待があるからだという。

「国際線の就航が増えたことで、観光業などをはじめ地域に経済波及効果が生まれました。地域の皆さんにとってその体験は大きく、空港の活性化が地域に良い結果をもたらすという思いがあります。空港でイベントを行うと地元のメディアも取材に来ていただくなど関心も高い。そのような背景もあって、我々も関係企業と協力していち早く再開することができたのだと思っています」



旅客ターミナルビル増改修プロジェクトの完成イメージ図。同時時間帯での国際線3便受入に対応するために、国際線旅客ターミナルビルの増改修と搭乗橋を増設し、国際線の到着・出発機能の容量を拡大する



2019年8月にオープンの高松空港直営ショップ「四国空市場(YOSORA)」。四国四県からお土産の定番商品のみならず、アート関連商品や民芸品、特産物などが並ぶ

高松空港を日本で一番良い空港に

高松空港では、空港ミッションとして「空港から人と街を元気に」を掲げ、これを上位概念として、空港の将来イメージを「アジア・世界とつながる四国瀬戸内No. 1の国際空港」と謳っている。では、高松空港の目指す「四国瀬戸内No. 1」とは何か。コロナ禍の期間、改めて社内で議論する時間を得たという。

「どうしても『旅客数No. 1』ということになりがちですが、それだけではない。空港の安全・安心の確保は当然の目標としつつ、やはり良い仕事をして『空港から人と街を元気に』することが我々の存在意義・目的だと。これを全社員が共有して各々の持ち場でがんばっていただく。そして、地域の皆さんにも、『やはり高松空港は良い空港だね。日本の空港の中でも一番良い空港だね』と思っていただく。

これもNo. 1だという話をしました。ですから今後もこのことを念頭に引き続き空港運営に取り組んでいきたいと思っています」

現在の課題は物価高騰。その波は空港運営にも影響が出ている。旅客数増加によって売上は伸びてはいるものの、運営コストも上昇しているために、なかなか赤字幅の縮小につながらないのが課題だ。コロナ禍で進めたコスト削減にも限界がある。

「とはいえ我々自身が元気でなければ、人様も元気にできません。2025年で民営化7年目となります。早く自分たちの足で立ち上がり、しっかりと空港の運営に取り組んでいく。そこに到達することが、目下最大の課題になります」



写真上：
立体駐車場



写真下：
ターミナルビル新付
属棟。ともに2019年
に竣工。
特に立体駐車場は以
前から慢性化してい
た既設駐車場の混雑
状況を解消するため
に民間委託後に早期
に着手して1年未満
で完成させた



高松空港旅客ターミナル内に展示されている瀬戸内国際芸術祭作品。写真右『ファニーブルー』。写真左『ウェルカム』。作者はヴェロニク・ジュマル



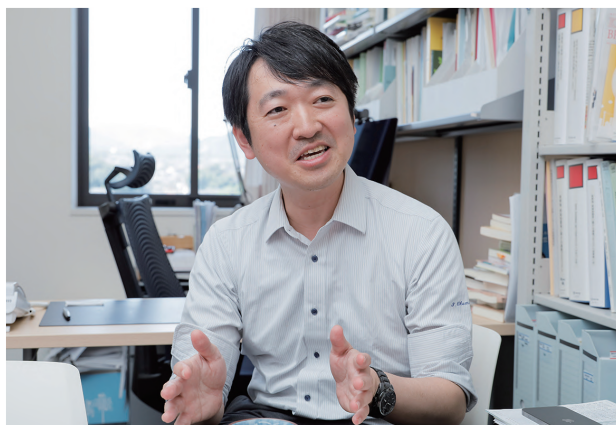
高松空港の入口に1989年に設置されたイサム・ノグチの遺作『TIME AND SPACE』

この人の仕事の流儀

防災・減災は、 人・組織・地域を成長させる

—防災・減災の新時代における先導者—

「やりたい人」「自ら考え動く人」を増やすことができれば日本の防災・減災は新たな段階に入ることができる—そう語るのは、関西大学の奥村教授です。防災・減災と真剣に向き合うことは、人や組織、そして地域そのものを成長させる可能性を秘めています。起こりうる巨大災害に対して、私たちは何を備え、どう動くべきか。防災・減災の第一線を走る奥村教授に伺いました。



奥村 与志弘

関西大学 社会安全学部
教授

経歴

2003年 3月 京都大学 工学部 地球工学科 卒業
2005年 3月 京都大学大学院 工学研究科 都市環境工学専攻 修士課程 修了
2008年 3月 京都大学大学院 情報学研究所 社会情報学専攻 博士後期課程 修了
2008年 4月 公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構 人と防災未来センター 専任研究員
2012年 4月 京都大学大学院 地球環境学 助教
2017年 4月 関西大学 社会安全学部 准教授
2022年 4月 関西大学 社会安全学部 教授

防災と減災は似て非なるもの —少しでも被害を減らすために

関西大学の奥村教授は、自然災害による人的被害の最小化を目指し、民間企業、行政機関、地域の住民組織と連携しながら、実践的な研究に取り組んでいます。

「私の専門は、平たく言えば“防災”と“減災”ですが、この二つは似て非なる概念です。“減災”という考え方は、1995年の阪神・淡路大震災を契機に生まれ、徐々に社会に浸透していきました。“防災”は災害による被害の発生を未然に防ぐことを理想としますが、現実には被害を完全に抑えきれない場面も少なくありません。そうした局面において重要となるのが、被害を少しでも軽減しようとする“減災”の視点。例えば、南海トラフ巨大地震のような未曾有の災害に備えるには、“防災”の理念に加えて、“減災”という現実的な発想を併せ持つことが不可欠です」

2025年3月、政府は南海トラフ巨大地震に関する新たな被害想定を13年ぶりに公表しました。奥村教授は、『南海トラフ巨大地震モデル・被害想定手法検討会^{※1}』及び『南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ^{※2}』の委員を務め、この見直しに深く関与しています。今回の想定では、揺れや津波による死者数29万8,000人とは別に、これまで数値化されてこなかった災害関連死が5万2,000人と見込まれ、かつてない規模の被害が想定されています。

「東日本大震災の経験を踏まえて前回発表された被害想定以降、津波避難対策など、防災・減災の取り組みは各地で着実に進みました。大阪でも、前回の想定で梅田地区が津波浸水区域に含まれるとされたことを受け、様々な対策が講じられ、避難意識も確実に高まっています。ただし、来街者や観光客など、土地勘のない方々にまでその情報が届いているとはいいがたく、実際の災害時に適切な避難行動をとることは容易ではありません。だからこそ、誰もがとっさに逃げられるような“まちづくり”が求められます」

※1 南海トラフ巨大地震モデル・被害想定手法検討会

内閣府に設置された有識者による検討会。南海トラフ地震における被害想定手法を検討するとともに、地盤モデル等の見直しや新たな被害想定に向けた計算法を検討

※2 南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ

中央防災会議「防災対策推進検討会議」の下に設置され、南海トラフ地震防災対策の進捗状況の確認や新たな防災対策の検討を実施

防災よりもはるかに難しい減災 —壊れても守る、逃げて助かる

防災よりも、減災の方がはるかに難しいという、奥村教授。

「私が行った社会調査では、梅田地区で津波警報が発表された場合、大阪周辺の居住者の8割以上が『避難する』と回答しました。しかし、『どこに避難しますか?』と尋ねると、4割が『高台』と答えたのです。しかし梅田には高台はありません。指定避難ビルと答えた人も同程度いましたが、その存在を知っている人はわずか1割にとどまりました。これでは、避難の意思があっても、実際には避難できないまま命を落としかねません」

多くの来街者が行き交う大都市・大阪で、全ての人が確実に避難できるようにする—その難しさから、私たちは目を逸らしてはなりません。

「御堂筋通り沿いの建物であれば、どこでも2階3階に逃げ込んで助かるような街にしたい。全ての建物を津波避難ビルにせよ、ということではありません。むしろ、御堂筋を“歩行者中心の通り”にし、パリのシャンゼリゼ通りのような空間へと発展させることが有効ではないかと考えています。Googleストリートビューで確認しても、シャンゼリゼ通り沿いは全ての建物が商業施設であり、誰もが逃げ込めそうです。避難ビルに指定されていない施設の関係者であっても、

いざというときに来街者を受け入れるかどうかを即座に判断できるようにする。そのために、私たち研究者が貢献できる知見を蓄積したいのです」

自ら考え自ら動くこと そして、今、動くこと

奥村教授の研究や社会実践のスタイルは、「自ら考え、自ら動くこと」、しかも、『いつか』ではなく、『今』動くことだといいます。スピード感を持って取り組まなければ、災害は待ってはくれないからです。

教授のもとで学んだ学生たちの中には、まさにそのスタイルを体現するように、独自の発想で動き出す者も少なくありません。

例えば、令和6年能登半島地震の際には、ボランティアとして現地に行きたくても行けない学生が多い現状に気づいた学生たちが、自ら学生団体を立ち上げました。安全靴の貸し出し、ボランティア登録の代行、交通費を抑えるためのレンタカーの活用など、一歩踏み出せずにいる学生の背中をそっと押すような環境整備を行い、70人以上の学生が被災地で活動したといいます。

「私は顧問にはならず、求められたときにだけアドバイスをして見守りました。彼らが自分たちの力で企画・運営している姿は、本当に頼もしく見えました。この活動はその年の学長奨励表彰も受けていて、私に



防災・減災への意識を高めるために、雑誌や新聞の取材も積極的に受けられています



インドネシアで学生たちと。国内外を問わず災害調査が続けられています



兵庫県南あわじ市では、地元製造のそうめんを非常食として備蓄を進めています。これを学んだ学生たちが、大学祭で学生たちが避難食としてのそうめんを調理・提供し、大好評でした



研究室にて。防災・減災の厳しい状況をご説明されながらも、笑顔が絶えない取材でした

とっても誇らしい出来事でした。このような経験を、社会に出ても続けてほしいと願っています」

知りたい心を揺さぶり、 社会に踏み出す力に変える

若い学生たちは、なぜ奥村教授のもとで防災・減災を学ぼうと思うのでしょうか。

「避難や災害関連死に関心があり、『深く学びたい』という学生もいれば、大学生活で『これをやった』と胸を張って言える何かが欲しくて、この研究室を選んだという学生もいます」

講義で教授が嬉しそうに語る姿に惹かれて、「もっといろんな話を聞きたい」と思ったのがきっかけだった、という学生もいるそうです。

「私にとっての講義とは、役者にとっての舞台のようなもの。『知りたいことがない』学生たちに、『もっと知りたい』と思わせるような話をたくさん用意します。学生の反応を見ながら、内容にアレンジを加え、レジュメを見るだけでは聞けない話をする。まさに、真剣勝負なのです。もし寝ている学生がいたら、それは私の力不足。プロとして反省します」

そう語る奥村教授のもとで学んだ学生たちは、行政や土木の業界はもちろん、流通、飲食、自動車など多様な分野に進み、防災の可能性を追求し続けています。その中には、SCOPEに入職し活躍している者もいます。

いのちを守るために —災害関連死に立ち向かう

現在、奥村教授が最も力を注いでいるテーマの一つが、「災害関連死」の問題です。大規模な災害が発生すると、過酷な避難生活を余儀なくされ、命が失われます。阪神・淡路大震災を機に、広く社会に知られるようになりました。その後も被害は繰り返され、令和6年能登半島地震でも380名以上が犠牲になりました。

「災害関連死を減らす対策は、まだまだ改善の余地があります。だからこそ、今回の新たな南海トラフ巨大地震の被害想定では、災害関連死を定量的に評価するべきだと考えていました。結果として5万2,000人という死者数が示されました。この問題の大きさを改めて問い直すきっかけになればと思います」

災害関連死を減らすためには、まずその実態を正確に把握し、社会全体での理解を深めることが必要です。奥村教授は、NHKと連携して、災害関連死についてわかりやすく解説する番組に出演したり、災害関連死の実態を共同で分析しています。

「昨年末も、学生たちと能登地震のデータの分析に没頭していました。災害関連死の背景を丁寧に読み解く作業は決して楽ではありませんが、その先にこそ、“命を守る防災”の本質があると思っています。災害関連死対策にこれからも全力で向き合っていきたいです」

佐賀を豆腐の聖地に

第4回

多くの壁を乗り越えて



平川 大計

株式会社佐嘉平川屋 代表取締役

地域との壁

これまでやってきた中で苦労したのが地域との壁です。

主力の温泉湯豆腐は嬉野温泉発祥の湯豆腐です。私たちの会社は隣の武雄市にあるため、嬉野の関係団体の了承を得てから温泉湯豆腐を作り始めました。

ただ、私が必死になって売上を伸ばしていく中、嬉野で私たちが加入できない温泉湯豆腐の団体が立ち上げられ、よそ者である私たちを明らかに排除しようとする動きが見られるようになりました。その後も、差出人不明の脅迫めいた手紙が頻繁に届くようになりました。もちろんごく一部の人間によるものだと思いますが、誰もが私に敵意を持っているように見えて人間不信に陥りました。ですが、長期的に続けていくためにはどうしてもこれらの問題を解決しないわけにはいきません。

このため、嬉野に直営の店舗を作り拠点を設けることにしました。当時としては相当な投資で、あらゆる人から猛反対されました。ですが、嬉野に拠点が絶対に必要だと思っていたのでどうにか資金を調達し、2010年にオープンを迎えました。

当初は採算ラインの1/4しか売上がない状態が続き、本当に苦しかったです。しかし5、10年と時が経つにつれて多くの方に知られるようになり、今では行列ができ人気店と呼ばれるようになりました。

そして時間とともに地域に溶け込み、ようやく信用も得ることができたのかなと思っています。



嬉野店

水害やコロナを乗り越えて

2019年と2021年には大きな水害と2020年にはコロナ禍という壁がありました。

壁を乗り越えるごとに会社は強くなり、お客様、従業員、地域社会というステークホルダーの信頼が積み上がってき

たと感じています。そうして、家業を継いだ時には到底辿り着けないと思っていたところまで来ることができました。自分自身驚いています。想いは叶うということは本当なのだと感じています。

2022年には西九州新幹線開業に合わせて武雄温泉の一等地にフラッグシップとなる店をオープンしました。役所を辞める時、いつか居心地の良い空間を作りたいと思っていましたが、ようやく実現することができました。

この店舗をきっかけに多くのメディアで取り上げられ、その波及効果で通販、店舗、卸、全てのチャンネルで大幅に売上を伸ばし、売上、利益ともに過去最高を更新し続け、



武雄温泉本店

この3年間で売上は1.5倍に、入社当時と比較すると9倍にまで成長することができました。

佐賀を豆腐の聖地に

佐賀は温泉湯豆腐をはじめとした独自の豆腐文化があり、全国でも有数の大豆の栽培地です。豆腐は京都が有名ですが、佐賀はそれに負けないポテンシャルがあると思っています。高校生の頃は構造物のような長く残るものを作りたいと土木を志しましたが、現在では文化こそ長く残るものだと考え豆腐文化の創造に情熱を注いでいます。

そのために店舗という佐賀の豆腐文化を体験できる場を作り、そこに全国、そして海外から多くのお客様が来てくれています。今後はさらに進化させて、佐賀に豆腐のオーベルジュも作っていききたい、将来的には海外にも佐賀の豆腐文化を体験できる店舗を作っていきたいと思っています。

世界の2大課題は人口問題と環境問題と言われています。豆腐はどちらの課題にも貢献できるものです。今後、豆腐はもっと世界で広まっていくはずで。いつか世界が豆腐を認めた時、世界中の人たちから「豆腐といえば佐賀」と言ってもらえるようにしていくのが、今後の私の目標です。

表紙写真



高松の空の玄関口から海の玄関口へ、そして瀬戸内の島々まで。アートと近代建築が根付く高松のみなとまちづくりは、しっかりと人々の生活に根付き、そして訪れる人々に常に刺激を与えている

編集後記

今回は、香川県高松市でのみなとを中心としたまちづくり、瀬戸内国際芸術祭をはじめとした香川県庁などの芸術(アート)に対する取り組みについて特集しました。

一般的には、公共建築物とアートとは関連性があまりないと思われがちですが、香川県では1950年代の県庁舎の建築以来、著名な建築家、芸術家とのつながりができ、香川県にアートが根付き、人を呼び寄せるようになったという池田知事のお話は大変興味深いものでした。

また、4回にわたって連載された「佐賀を豆腐の聖地に」は今回で終了となります。平川様が旧運輸省退職後に家業の豆腐屋を継いでからのこれまでの歩みについてご紹介いただきましたが、こちらの連載も毎回大変興味深いものでした。

取材にご協力いただいた方々、平川様に感謝いたします。



発行 一般財団法人 港湾空港総合技術センター

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館3F
TEL 03-3503-2081(代表) FAX 03-5512-7515
URL <http://www.scopenet.or.jp>



本紙は地球環境保護を考慮し、
植物油インキを使用しております。